

日本児童英語教育学会

中国・四国支部

初等教育教員養成課程（外国語・英語）研究部会

2023年～2025年度報告書

2026.6.12



## 第 1 部

### 研究部会の取組について

平本哲嗣（安田女子大学）

#### 1. 研究部会について

2023 年 4 月 1 日に、日本児童英語教育学会中国・四国支部が「初等教育教員養成課程（外国語・英語）研究部会」を立ち上げた。その目的は、①小学校教員養成課程を持つ教育機関における外国語科の指導に関する現状把握・情報共有、②小学校教員養成課程における外国語指導者養成上の問題に関する協議、③小学校教員養成課程における外国語科担当者間のネットワーク作りであった。

研究部会のメンバー募集は、中国・四国支部の会員及び全国の会員を対象に行われた。その結果、表 1 に示す 10 名の参加があった。

表 1. 初等教育教員養成課程（外国語・英語）研究部会メンバー（代表以下は五十音順）

平本哲嗣	安田女子大学・研究部会代表
大谷由布子	大分大学
加藤みゆき	名古屋学院大学
國本和恵	岡山理科大学非常勤
佐藤大介	川崎医療福祉大学
澁井とし子	東京福祉大学
戸井一宏	広島文教大学
中垣州代	畿央大学
二五義博	山口学芸大学
フェネリー マーク	四国大学

## 2. 取組の概要

本研究会は、研究メンバーを募り、メンバー確定後にメーリングリストを立ち上げ、2023年から2024年にかけて研究方法を探った。その後はメーリングリストでのメール審議及びオンラインミーティング（Zoom）でデータ分析等の調査研究を実施した。

本研究について、2025年11月30日（日）に開催された日本児童英語教育学会第45回秋季研究大会において、「小学校教員養成課程における学生指導上の課題—『外国語の指導法』に関する実態調査—」というタイトルで発表を行った。

調査研究の成果については第2部で報告する。

なお、2026年度以降も、第二期として研究部会を継続する。

## 3. 本報告書の構成

本報告書は、3年間の取組や研究の成果をまとめたものである。第1部では、研究会の組織や取組について概略報告する。第2部では、調査研究を報告する。

## 第 2 部

### 調査報告

## 小学校教員養成課程における学生指導上の課題

### — 「外国語の指導法」に関する実態調査—

JASTEC 初等教育教員養成課程（外国語・英語）研究部会（以下メンバー）

平本哲嗣（安田女子大学） 大谷由布子（大分大学）

加藤みゆき（名古屋学院大学） 國本和恵（岡山理科大学非常勤）

佐藤大介（川崎医療福祉大学） 澁井とし子（東京福祉大学）

戸井一宏（広島文教大学） 中垣州代（畿央大学）

二五義博（山口学芸大学） フェネリー マーク（四国大学）

Issues in Student Guidance in Elementary School Teacher Training: An Empirical Survey on “Foreign Language Teaching Method”

JASTEC Research SIG on Elementary Teacher Education Programs (Foreign Languages/English)

HIRAMOTO Satoshi (Yasuda Women’s University)

OTANI Yuko (Oita University)

KATO Miyuki (Nagoya Gakuin University)

KUNIMOTO Kazue (Okayama University of Science, Parttime)

SATOH Daisuke (Kawasaki University of Medical Welfare)

SHIBUI Toshiko (Tokyo University of Social Welfare)

TOI Kazuhiro (Hiroshima Bunkyo University)

NAKAGAKI Kuniyo (Kio University)

NIGO Yoshihiro (Yamaguchi Gakugei University)

FENNELLY, Mark (Shikoku University)

キーワード： 教員養成, 外国語（英語）コアカリキュラム, 外国語の指導法

#### 1. はじめに

小学校教員養成課程の課程認定においてはコアカリキュラムへの準拠が求められており、外国語（英語）もその例外ではない（「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」<sup>1</sup>以下「コアカリ」）。現在、大学ではこのコアカリに基づく内容を扱い、学生の教育を行っている。教職学生に対する調査はあるものの（生田, 2018; 泉, 2019; 瀧沢, 2019; 小柴, 2021;

二宮・相馬・北原, 2023), コアカリ展開の実態について大学教員を対象とした研究は必ずしも十分に行われているとは言えない<sup>2</sup>。そこで本研究では, 小学校教員養成課程を有する大学で指導にあたっている教員を対象にアンケート調査を実施することとした。本調査では以下の2つの研究課題を設定した。

研究課題1: コアカリで示された各到達目標の到達難易度について授業担当者はどのように認識しているのか(4件法による調査)。

研究課題2: 通常の授業においてコアカリの観点から, 授業担当者はどのような工夫や苦勞をしているのか(自由記述による調査)。

## 2. 調査対象

本調査では, 文部科学省のサイトで示されている令和6年度段階で小学校教員免許状(一種・二種)の課程認定を受けている大学・短期大学, および令和7年度より同課程を設置した大学を対象とした。調査対象となる大学・短大数は277校となり, 協力依頼は郵送によって行った。回答はGoogleフォームまたはExcelファイルの電子メール送付によって受け付けた。調査時期は2025年7月から8月末とし, 結果として50校の担当者から回答があった(回答率19.9%)。なお, 外国語のコアカリには「外国語の指導法」と「外国語に関する専門的事項」の2つがあるが, 今回は授業担当者(=回答者)が多数に広がる可能性を考慮して前者のみの調査を行うこととした。

## 3. 質問項目

コアカリ(外国語の指導法)では「一般目標」が4つ, またこれらの下により具体的な「到達目標」が示されている(質問の詳細は末尾の資料1を参照)。今回の調査では「到達目標」に対する指導者の認識を調査した(Q6-41)。なお各到達目標に2問割り当てられているが, これは指導難易度に対する4件法の質問と苦勞や工夫に関する自由記述の質問の2つを含んでいるためである。

## 4. 研究課題1(コアカリにおける各到達目標に関する難易度認知の量的調査)

### 4.1. 調査内容

今回の調査では各到達目標の指導について4件法(「全く難しくない」「あまり難しくない」「やや難しい」「とても難しい」)の調査を行った。得られた調査結果について, 量的分析を行うため, 各選択肢について「全く難しくない」を1, 「あまり難しくない」を2, 「やや難しい」を3, 「とても難しい」を4と数値化した。さらに, Q6-7, Q8-9, Q10-11, Q12-13を分類「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」(「小学校外国語教育」と略)に, Q14-15, Q16-17, Q18-19, Q20-21, Q22-23, Q24-25を分類「子供の第二言語習得についての知識とその活用」(「子供の第二言語習得」と略)に, Q26-27, Q28-29, Q30-31を分類「指導技術」に, Q32-33, Q34-35, Q36-37, Q38-39, Q40-41を分類「授業づくり」とし, それぞれの

分類別の平均値，標準偏差，最小値，最大値，中央値を算出した。また，各分類間の相関についても相関分析を用いて検討した。基礎統計のデータは以下のとおりである。

表1 記述統計1（「小学校外国語教育」「子供の第二言語習得」）

指導内容	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Min.</i>	<i>Max.</i>	<i>Median</i>
<b>小学校外国語教育についての基本的な知識・理解</b>	<b>50</b>	<b>2.44</b>	<b>0.59</b>	<b>1</b>	<b>3.8</b>	<b>2.50</b>
Q06 「小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動や外国語科、中・高等学校の外国語科の目標、内容について理解している。」の指導	50	2.14	0.66	1	4	2.00
Q08 「主教材の趣旨、構成、特徴について理解している。」の指導	50	2.44	0.78	1	4	2.00
Q10 「小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している。」の指導	50	2.40	0.82	1	4	2.00
Q12 「様々な指導環境に柔軟に対応するため、児童や学校の多様性への対応について、基礎的な事柄を理解している。」の指導	50	2.76	0.81	1	4	3.00
<b>子供の第二言語習得についての知識とその活用</b>	<b>50</b>	<b>2.61</b>	<b>0.62</b>	<b>1</b>	<b>4</b>	<b>2.67</b>
Q14 「言語使用を通して言語を習得することを理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.46	0.81	1	4	2.00
Q16 「音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.62	0.82	1	4	3.00
Q18 「児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.78	0.81	1	4	3.00
Q20 「コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.44	0.90	1	4	2.00
Q22 「受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.54	0.83	1	4	2.00
Q24 「国語教育との連携等による言葉の面白さや豊かさへの気づきについて理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.82	0.84	1	4	3.00

表2 記述統計2（「指導技術」「授業づくり」）

指導内容	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Min.</i>	<i>Max.</i>	<i>Median</i>
<b>指導技術</b>	<b>50</b>	<b>2.81</b>	<b>0.75</b>	<b>1</b>	<b>4</b>	<b>2.83</b>
Q26 「児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる。」の指導	50	2.82	0.93	1	4	3.00
Q28 「児童の英語での発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる。」の指導	50	2.90	0.85	1	4	3.00
Q30 「文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方について理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.72	0.83	1	4	3.00
<b>授業づくり</b>	<b>50</b>	<b>2.66</b>	<b>0.61</b>	<b>1</b>	<b>4</b>	<b>2.80</b>
Q32 「題材の選定、教材研究の仕方について理解し、適切に題材選定・教材研究ができる。」の指導	50	2.60	0.80	1	4	3.00
Q34 「学習到達目標に基づいた指導計画（年間指導計画、単元計画、学習指導案、短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメント等）について理解し、学習指導案を立案することができる。」の指導	50	2.76	0.84	1	4	3.00

Q36 「ALT等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。」の指導	50	2.56	0.80	1	4	3.00
Q38 「ICT等の効果的な活用の仕方について理解し、指導に生かすことができる。」の指導	50	2.42	0.85	1	4	2.00
Q40 「学習状況の評価(パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む)について理解している。」の指導	50	2.98	0.86	1	4	3.00

表3 分類別相関係数

	小学校外国語教育	子供の第二言語習得	指導技術	授業づくり
小学校外国語教育	-	.77**	.57**	.75**
子供の第二言語習得		-	.70**	.76**
指導技術			-	.70**
授業づくり				-

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ ,  $df = 48$

#### 4.2. 結果 (表1, 表2, 表3 参照)

回答の平均値をみるかぎり, 回答者はコアカリの到達目標についてやや難しいと感じていることがわかる。特に, 「授業実践に必要な知識・理解」に関する指導よりも, 「授業実践」に関する指導の方が難しいと考えていることが読み取れる。特に指導が難しいと感じられる到達目標上位5項目は平均値順にみると以下のような結果となった。

1位: Q40-41 「学習状況の評価 (パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む) について理解している。」

2位: Q28-29 「児童の英語での発話を引き出し, 児童とのやり取りを進めることができる。」

3位: Q24-25 「国語教育との連携等による言葉の面白さや豊かさへの気づきについて理解し, 指導に生かすことができる。」

3位: Q26-27 「児童の発話につながるよう, 効果的に英語で語りかけることができる。」

5位: Q18-19 「児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し, 指導に生かすことができる。」

また, 以下は一般目標の4つの分類別に難易度の順位である (1位が最も難易度が高い)。

1位: 「指導技術」

2位: 「授業づくり」

3位: 「子供の第二言語習得についての知識とその活用」

4位: 「小学校外国語教育についての基本的な知識・理解」

相関係数から, 「授業づくり」は, 「小学校外国語教育」「子どもの第二言語習得」「指導技術」と強い相関があった。「子どもの第二言語習得」は, 「基本的な知識理解」と「指導技術」と強い相関があった。「基本的な知識理解」と「指導技術」は比較的強い相関があった。すべての分類間で相関が確認され, さらに統計上有意な差も確認できたことから, 指導の難しさが一つあれば他の項目の指導も難しいと考える可能性があることが分かった。

## 5. 研究課題2（自らの実践における工夫と困難点に関する自由記述）

### 5.1. 調査内容

アンケートにおける質問形式としては各到達目標の「指導について工夫しておられること、苦勞しておられることを教えてください」とした。なお、本調査では研究課題1の質問群に Q42 として「上記の回答の他「外国語の指導法」の指導について何かご意見や気付きがあればご記入ください」という自由記述項目を追加し、回答者からの自由な意見を収集するようにした。回答の分析手法としては、入力された情報の確認・修正（誤変換や日本語の不自然な点の修正）を行った後、生成 AI でのテキスト分析、またこれに加え部会メンバーによる目視での読み込み、肯定的・否定的意見のマーキングを行い、再度部会メンバーによる確認作業を行った。

アンケート調査における自由記述回答の分析には様々な手法がこれまで用いられてきた。近年研究で多用されているものとしてテキストマイニングの手法がある。これは回答におけるキーワードを抽出し、そのキーワードの出現頻度や他のキーワードとどのような意味ネットワークを形成するのかを分析する手法である。代表的なものとしてはKH Coderを用いた研究群が挙げられる。KH Coderなどのアプリケーションを用いた手法の長所は、調査者が異なっても安定した分析結果を出力する点である。自然言語という極めて複雑な対象を、文の分節化、そして関連付けという作業を通じて、再現可能な形で分析する点にはある程度の客観性が担保されていると言えよう。

しかし、アプリケーションを用いたテキストマイニングにも問題は存在する。まずデータ分析が原則として明示的な表現の分節化に基づくため、似た意味をもつ語句の関連付けが困難である点が挙げられる。さらに、記述の単位が基本的に分節化された語句レベルであるため、グルーピングされた語句の関係性の解釈は調査者の判断に委ねられることになる。また基本的には出現頻度という観点で分析がされており、このことは「繰り返し言及されるものほど重要性が高い」という前提を受け入れていることになる。実際には、出現頻度の低い語句であっても教育的には大切な意味を持つことがあり、表面的なテキスト分析をもって、自由記述の質的評価を行うことには疑問が残る。

そこで本調査では、自然言語のより高度な分析を模索すべく、ここ数年で著しい進化をとげた生成AIを用いることとした。生成AIにおいては、莫大な量の情報を深く学ぶこと（ディープラーニング）で、単に表面的、形式的な分析ではなく、記述内容をより深く掘り下げた分析を行うことができる。生成AIを用いてアンケート結果を分析した研究はまだ数は多くなく、その信頼性はまだ十分把握されているとはいいがたい。しかしながら、生身の人間による評価における分析のぶれの回避、また従来のテキストマイニングに伴う語句レベルの表面的な分析の回避という2つを達成するためには生成AIの活用には意義があると思われる。そこで今回は自由記述回答の分析に生成AIを取り入れ、学術研究においてこれをどう活用するか検討することも試みることにした。

本調査では ChatGPT 5.0 と Claude 4.5 を利用し、複数の視点からデータを分析した<sup>3</sup>。またこれらの生成 AI の出力結果を部会メンバーが再度読み込むことで、分析の一貫性を保ちつつ、直感的にも同意できる結果を出すよう努めた。自由記述データの分析においては、キーワードや概念の切り出しが必要となるが、これについては ChatGPT 5.0 を利用し、各問においてキーワードの抽出および階層化を試みた（資料 2,3,4）。その後、Claude 4.5 を活用して、質問ごとに主な工夫点と課題点を分析した（資料 5）。今回の調査では工夫している点、および苦勞している点を混在して回答する形式となっており、Q42 以外を指導難易度（4 件法）のレベルと組み合わせて分析を行った。

## 5.2. 結果

Q6-7（小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動や外国語科、中・高等学校の外国語科の目標、内容について理解している）については、学習指導要領を主とした文部科学省の公式資料や授業動画を活用して指導内容を具体化・明確化する工夫が見られた。指導手段としては、Kahoot 等のツールを用いた参加型学習に加え、LMS (Learning Management System) 上での動画教材の配信および小テストの実施といった ICT の活用、模擬授業や体験学習を通じた理論と実践の往還により、学生の理解を高める工夫が試みられている。課題としては、学生の理解が表面的なもので終わる傾向があることや、理論と実践の連携には時間的制約もあり指導が難しい点が指摘された。また、「外国語活動」の扱いにおいて、制度的な位置づけの曖昧さが指導上の困難につながっていることが示唆された。

Q8-9（主教材の趣旨、構成、特徴について理解している）については、実際の教材・教科書・デジタル教科書を活用して、学生自身が教材を分析する実践的学習が重視されていることが示された。課題としては、教材そのものの質的な問題に加え、教材を分析する学生の英語力、デジタル教材の操作に不慣れといった教員側の問題、そして教科書間の相違や教材分析に割ける時間の不足が挙げられた。

Q10-11（小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している）については、校種間比較と役割理解の促進が最も重視されており、校種間のつながりを授業動画で可視化する試みや現場の実情を多角的に紹介する等の工夫、教育実習後に当該内容の指導を行うことで理解を深める取り組みが見られた。課題としては、現場における連携不足、学生が自身の経験した小学校英語の認知的枠組みからの脱却が困難な状況にあること、小学校は子どもを送り出す立場にあるため、中学校・高等学校側のニーズを理解しにくいという構造的な課題等が指摘された。

Q12-13（様々な指導環境に柔軟に対応するため、児童や学校の多様性への対応について、基礎的な事柄を理解している）については、理論的枠組みの導入が重視されており、Gardner が提唱した多重知能理論、CLIL（内容言語統合型学習）、特別支援教育、ICT 活用の視点から指導が行われ、多様な児童の特性に対応する視点を提供する工夫が見られる。実践面では、具体的な事例紹介、他教科の授業と連携したり多重知能（8 つの知能）を活用したりして多

様性理解を深める工夫、デジタルツールを活用した個別最適化のための実践が有効に機能していることが示された。一方で、この領域は困難度が比較的高く、学習者の多様性も大きいため、学生が具体的なイメージを持ちにくいという根本的課題を抱えている。加えて、多様性の範囲設定や扱いの難しさ、英語ディスレクシアなど、扱うべき領域の広がりに対して十分に対応しきれていない現状、指導時間の不足ならびに指導者自身の多様性対応における限界意識が課題として挙げられた。

Q14-15（言語使用を通して言語を習得することを理解し、指導に生かすことができる）については、第二言語習得理論を初等教育向けに分かりやすく説明する、教育委員会や文部科学省提供の動画視聴、クラスルームイングリッシュの指導、模擬授業、教員によるデモ授業やロールプレイなど、理論と実体験を通して授業の具体を理解させる指導が報告された。困難な点として、理論と実践が結びつかない、学生の英語指導観がドリル中心主義や解説中心、文法訳読式から言語使用を通して習得させる指導法に切り替わらない、指導時間の不足、学生の英語力不足が指摘されている。

Q16-17（音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し、指導に生かすことができる）については、インプット仮説やフォニックスなどの理論と音声指導に必要な知識の指導や模擬授業やペアワーク等による体験を通じて学生の理解を促す工夫が見られた。一方で、学生が日本語ですぐに説明してしまうなどインプットから類推させる重要性を認識していないなど、理論と実践の乖離が困難点として挙げられている。課題として、教材不足や学生の英語力不足が顕著で指導法科目だけでは扱いきれないなどの指摘があった。

Q18-19（児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる）については、第二言語習得理論や、教育心理学、発達心理学などの知見の援用、多感覚アプローチの採用、学校訪問・海外実習、模擬授業等を活用した指導が報告されている。授業ではTPRやチャンツの体験的活動により実践的理解に結び付ける工夫がなされている。困難な点として、学生が児童の発達を十分想像できないが故に英語の使い分けができない点、理論と実践の乖離が挙げられた。

Q20-21（コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる）については、教材や文部科学省の動画・資料提示、模擬授業やロールプレイ・ペアワークを取り入れた理論と実践の往還的指導の事例が多く報告された。課題としては、学生の英語力不足、実践のための時間不足、英語のやりとりが短いやりとりの練習になりがちで、「意味のあるやりとり」になりにくい点が指摘された。

Q22-23（受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる）では、フォニックスの指導、模擬授業や体験的活動の導入、文部科学省動画の活用、教材分析などが報告された。困難点としては、学生の訳読型への志向、文字偏重の指導感を修正できない、フォニックス指導の時間不足、学生の実践的英語力不足が多く指摘された。

Q24-25（国語教育との連携等による言葉の面白さや豊かさへの気づきについて理解し、指

導に生かすことができる)では、「やや難しい」以上の回答が過半数を占めており、国語教育との連携は重要視されつつも実践上のハードルが高いことが分かる結果となった。工夫している点は、日本語と英語の言語学的特徴の比較、CLIL 理論と他教科横断的な指導が報告された。課題としては指導時間不足、大学の指導者における専門性の不足(国語科教育については知識が不十分)などが指摘された。

Q26-27(児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる)については、ティーチャートークやクラスルームイングリッシュの練習、スモールトークや模擬授業を定常的に行う、3分スピーチや教科書のリテリングなどの工夫が報告された。更に模擬授業やクラスルームイングリッシュの実践は効果的で、実践力を高める好例として挙げられている。学生が英語を話すことや英語での語りかけに慣れていないなど、学生の英語力不足、「効果的な語りかけ」のイメージの不足、練習時間不足やクラスサイズが大きい故の個別指導の困難さが苦勞している点であった。また、「効果的」という抽象的表現が指導者間で共有されておらず、評価規準の不明確さが課題であると指摘された。

Q28-29(児童の英語での発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる)においては、Q26-27と同様の工夫や課題が報告されているが、文部科学省や英語教育関連の動画教材を視聴し解説する、スモールトークや発話を引き出す練習、児童役がいる模擬授業や日本語禁止の模擬授業実施などの工夫が見られた。模擬授業(ロールプレイ)を通じた訓練が効果的であるが、実際の子どものやり取りに近づける難しさが指摘され、根本的な技能形成には至っていない。学生の英語力不足による自然なやり取りの難しさ、受講生の多さと実践練習の時間不足による実践困難が報告された。

Q30-31(文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方について理解し、指導に生かすことができる)では、「読む・書く」への移行を「音声体験の上に構築する」視点が多く共有されている。ジングルやフォニックス指導、教科書、文部科学省動画や絵本教材を活用する、4線の上に書く実践などの工夫があり、一定の指導効果を得ている。しかし、学生が英語の文字・発音規則に親しんでいないため、理論理解はできても実践が伴わない点が課題である。音声から文字への接続の難しさ、「読む・書く」に割ける指導時間の不足、及び学生の英語力不足に苦勞している点も指摘されている。

Q32-33(題材の選定、教材研究の仕方について理解し、適切に題材選定・教材研究ができる)の指導の工夫としては、共通教材 Let's Try!や検定教科書、デジタル教科書を用いての教材研究や他教科や異文化理解などを組み合わせたオリジナル教材作成が報告された。教材や教科書があることから、題材を選定する必要がないという意見や、指導法ならびに模擬授業に課する負担が大きいと、題材選定にまで時間をかけることができないことから、教員側で題材を選定しているとの回答もあった。苦勞としては、時間不足が多く報告され、履修者数が多いため丁寧な指導ができないことや学生の英語力に関わる課題も指摘された。

Q34-35(学習到達目標に基づいた指導計画(年間指導計画、単元計画、学習指導案、短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメント等)について理解し、学習指

導案を立案することができる)の工夫としては、国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』や自治体の資料を活用した実践的指導が報告されている。学習指導案立案においては、指導案モデルを提示した指導が多く、例を基に真似てみる、グループで話し合っって作成してみる、またそれらを段階的に取り入れて最終的には1人で作成してみるという指導が報告された。苦労としては、時間不足が多く指摘されている。その理由として、他の教科と異なり、授業のイメージをもつところから始める必要があること、年間指導計画や単元計画まで幅広く指導することの難しさがある。また、履修人数が多いと十分指導しきることが難しく、少人数の場合は、難しさを感じていない回答となっている。

Q36-37 (ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している)の指導の工夫としては、実際にALTを招聘して授業を行っているとの回答が多くあった。学生がALT役を行う模擬授業の実践も挙げられており、それによりチーム・ティーチングによる指導の在り方の理解が可能となっているとの報告がある一方、仮設定での想定難しさや学生の英語力不足によりALTには近づけない点が苦労として挙げられている。学生の英語力においては、2単位の授業内で育成することには限界があるとの指摘もあった。また、工夫として現場の様子を伝える、動画教材を使用する報告されているが、望ましい指導の在り方の知識レベルに留まり、実践につなげることの難しさも指摘された。

Q38-39 (ICT等の効果的な活用の仕方について理解し、指導に生かすことができる)についての指導の工夫としては、デジタル教科書やロイロノートなどのICT学習ツール、また、BlooketやKahoot、Canvaなどのアプリ、電子黒板を用いた体験学習が報告された。苦労としては、大学によっては、デジタル教科書を購入してもらえない、学生が一人ずつデジタル教科書を活用できない等の設備面での問題により、体験できないとの報告もあった。また、学生や大学教員のICTスキル不足、ICTの効果的な活用の指導の難しさも指摘された。

Q40-41 (学習状況の評価(パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む)について理解している)は、量的研究の結果、困難度1位となっている。その指導の工夫としては、具体例を提示して説明を行う、ビデオ視聴や資料を基にしながら評価する体験を行う、学生が評価項目を作成するなどが挙げられた。しかし、児童不在の中での評価の難しさが指摘された。苦労として最も多かった意見は、実習前は指導者も学生も評価への意識よりも指導が優先されていることである。学生が小学生の学年差や発達段階などについての理解や知識が不十分であることから、学習状況の評価においては、実習後に指導するカリキュラムの必要性が指摘された。また、国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』の説明や評価そのものが複雑であること、ルーブリックの在り方が不明瞭である点から、評価の視点が捉えにくいことも課題として指摘された。

Q42 (上記の回答の他「外国語の指導法」の指導について何かご意見や気づきがあればご記入ください)では、指導の現状について自由に意見を述べる問いを設定した。回答においては以下の3つの問題に起因する問題が特に指摘されていた。

- ① 学生の英語力不足 → 模擬授業の質低下 → 実践的指導力の未育成
- ② 授業時間不足 → 理論中心の指導 → 実践機会の欠如 → 理論と実践の乖離
- ③ 大人数授業 → 個別指導困難 → 学生の理解不足 → 評価指導の困難

これら3つの問題が生じる背景としては、大学入学前後にわたる学生の英語力不足、教員養成課程における時間的制約（小学校教員養成課程の学生は複数の教科について学ばなければならないという状況）、教育現場との連携不足（教職学生や指導教員の多忙さ）、さらにはクラスサイズの統制の困難さ（科目担当者の担当可能コマ数や大学の判断）等、単に外国語科のみの課題とはいえない点も指摘されている。

## 6. 考察とまとめ

小学校外国語教育の教員養成においては、学生の英語力不足 (Otani, 2025)、時間的制約 (土持, 2021)、現場との連携不足、大人数授業による個別指導の困難という4つの制約が、複数の質問項目でも障壁とされている。これらの問題を解決するためには、英語のコアカリで扱われている内容について、複数科目の連携を高めることでカバーする等の方法が考えられよう (足立 2016; 平本, 2021; 粕谷, 2021; Uehara et al., 2025)。また学校現場との連携を高めることも、学生の指導力向上のために欠かせないことが今回の回答から明らかとなった。教育実習や学校ボランティアの運用についても今後さらなる検討が必要となる。

学生の英語力不足については大学における指導の改善は勿論のことであるが、大学におけるアドミッションのあり方、さらに大学入学にいたるまでの英語教育についてもあらためて検討を加える必要がある。また従前より小学校教員は複数の教科を担当することが求められているが、果たしてこれが今後も維持できるかという点については議論を進める必要がある。すでに文部科学省からは外国語を含めて他の教科においても専科教員の可能性を推進する動きが出ている。もしこの流れがさらに強くなるのであれば、大学の教員養成課程においても教科の専門性を高めるためのコース制や専攻などを設ける可能性も出てくるだろう。さらに教職学生の指導力を高めるためには単にコアカリに示された要件を充足するだけではなく、各大学の特色を活かした教育プログラムの開発（例えば海外研修プログラムや海外の学校との交流活動など）が求められるかもしれない。

教育現場との連携については、大学近隣の小学校や教育委員会と連携することで、学生がより児童や授業の実態について見識を深める必要があるだろう。これを実現するためには小学校教員養成課程の学生の多忙さが障害となる。小学校の授業が行われている時期、時間帯に学生が小学校を頻繁に訪問することは困難を伴うのが実態である。この点、小学校への訪問や学校ボランティアを教員養成課程のコアに据えることやCAP制度（単位の過剰登録を防ぐため、1年間あるいは1学期間に履修登録できる単位の上限を設ける制度）の柔軟な運用、また大学に於ける授業の開講形態の見直しなど、全学的に検討する必要性も生じることとなる。換言すれば小学校教員養成課程におけるカリキュラム・オーバーロードに対して、適切なマネジメントを行うことで、学生が実践的に学ぶための時間を確保する努力が指導

側に求められている。

大学教員の抱える課題については、求められる専門知識やスキルが授業のニーズに追いついていない点が見受けられる。具体的な例として、ICTの活用については大学教員個人の得手不得手とともに、その技術的变化が速すぎるが故に新しい情報や技能の獲得が難しい。また学習者の多様性について、大学教員は英語科教育については専門性を有していても特別支援教育に関する知識は十分とは言えないのが実態ではないだろうか。同様に他教科との連携についても英語科教員にとっては重荷となる可能性がある。カリキュラム・マネジメントに際しては単に教育課程の構造的、制度的改革のみならず、学生指導にあたる教員間の協働が極めて大きな意味をもつと言えよう。

現在、文部科学省の資料・デジタル教材の効果的活用、模擬授業・グループ演習の充実、段階的な指導設計、相互評価・省察活動の導入など、有効な指導方略も蓄積されつつある。今後は、これらの知見を踏まえ、カリキュラム改革、少人数教育の実現、現場連携の強化、ICT環境整備、制度的・政策的支援の拡充を柱とした、包括的な教員養成改革が求められる。

#### 注

1. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf)
2. 長田 (2023) では少人数ではあるものの大学教員への調査紙調査を行っている。
3. 質的データの分析における生成 AI の使用について Nakao et al. (2025) では同一データを異なる生成 AI で分析した結果を報告している。異なる生成 AI 間での分析において重複する部分が多く、信頼性という観点から今後の質的データ分析のツールとしての可能性が示唆されている。

#### 記

本稿は 2025 年に開催された日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第 45 回秋季研究大会における研究・実践発表に加筆修正を行ったものである。

#### 謝辞

本調査は日本児童英語教育学会 (JASTEC) の研究部会に対する活動助成金を受け実施した。この場をお借りして JASTEC 本部事務局および役員諸氏、およびアンケート調査に協力いただいた諸先生方に感謝の意を申し上げる。

#### 引用文献

- 足立 望 (2016). 「大学教職課程におけるコアカリキュラムについての実践的研究—『小学校英語科教授法』と『小学校英語教育科目』をつなぐ—」 『岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要』 16, 161-170.
- 生田和也 (2018). 「外国語の指導力に関する学びと変容：コアカリキュラム案を踏まえた授

- 業デザインと自己評価分析」 『鹿児島女子短期大学紀要』 54, 24-38.
- 泉恵美子 (2019). 「小学校英語指導者養成における課題と展望：コア・カリキュラムを踏まえて」 『教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』 1, 11-20.
- 長田恵理 (2023). 「初等教職専門科目での英語接触時間の確保：英語による指導力向上を目指して」 『國學院大學人間開発学研究』 13, 47-58.
- 粕谷恭子（代表）(2021). 「英語教員養成コアカリキュラムの検証と具体的・包括的プログラムの開発」 『2018年度～2020年度 科学研究費補助金 基盤研究（B） 18H00687』  
[https://www2.u-gakugei.ac.jp/~coretgu/pdf/koakari\\_honbun.pdf](https://www2.u-gakugei.ac.jp/~coretgu/pdf/koakari_honbun.pdf)
- 瀧沢広人 (2019). 「小学校外国語（英語）コアカリキュラム案に対する学生の意識調査」 『岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学』 67(2), 101-110.
- 土持かおり (2020). 「『外国語（英語）コア・カリキュラム』をふまえた英語科教育法の授業実践」 『鹿児島県立短期大学紀要』 71, 53-65.
- 二宮孝行・相馬和俊・北原英法 (2023). 「小学校教員養成課程外国語（英語）における「英語科指導法」授業改善についての一考察」 『北翔大学教育文化学部研究紀要』 8, 177-183.
- 平本哲嗣 (2021). 「小学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム：安田女子大学における運用上の課題」 『安田女子大学紀要』 49, 97-106.
- Nakao, K., Oga-Baldwin, W. L. Q., Shum, A., & Fryer, L. K. (2025). Making Sense of Students Open Ended Feedback: A Multiple GenAI Approach to Exploration, Modelling and Model test  
[https://doi.org/10.35542/osf.io/u32zt\\_v1](https://doi.org/10.35542/osf.io/u32zt_v1)
- Otani, Y. (2025). Bridging the Gap: Developing Required English Proficiency in Future Teachers. 『大分大学教育学部紀要』 47, 35-50.
- Uehaera, K., Hoogenboom, R., Hosoi, H., and Ubukawa E. (2025). Toward the Development of a Coordinated EFL Teacher Training Curriculum: Teaching Methodology, Linguistics, Literature, Communication, and Cross-Cultural Understanding. 『育英大学研究紀要』 7, 1-20.

## 資料

## 資料1 「小学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム」に基づく質問項目

一般目標 1	小学校外国語教育に係る背景知識や主教材，小・中・高等学校の外国語教育における小学校の役割，多様な指導環境について理解する。
Q6-7	小学校外国語教育の変遷，小学校の外国語活動や外国語科，中・高等学校の外国語科の目標，内容について理解している。
Q8-9	主教材の趣旨，構成，特徴について理解している。
Q10-11	小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している。
Q12-13	様々な指導環境に柔軟に対応するため，児童や学校の多様性への対応について，基礎的な事柄を理解している。
一般目標 2	児童期の第二言語習得の特徴について理解する。
Q14-15	言語使用を通して言語を習得することを理解し，指導に生かすことができる。
Q16-17	音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し，指導に生かすことができる。
Q18-19	児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し，指導に生かすことができる。
Q20-21	コミュニケーションの目的や場面，状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し，指導に生かすことができる。
Q22-23	受信から発信，音声から文字へと進むプロセスを理解し，指導に生かすことができる。
Q24-25	国語教育との連携等による言葉の面白さや豊かさへの気づきについて理解し，指導に生かすことができる。
一般目標 3	実践に必要な基本的な指導技術を身に付ける。
Q26-27	児童の発話につながるよう，効果的に英語で語りかけることができる。
Q28-29	児童の英語での発話を引き出し，児童とのやり取りを進めることができる。
Q30-31	文字言語との出合わせ方，読む活動・書く活動への導き方について理解し，指導に生かすことができる。
一般目標 4	実際の授業づくりに必要な知識・技術を身に付ける。
Q32-33	題材の選定，教材研究の仕方について理解し，適切に題材選定・教材研究ができる。
Q34-35	学習到達目標に基づいた指導計画（年間指導計画，単元計画，学習指導案，短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメント等）について理解し，学習指導案を立案することができる。
Q36-37	ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。
Q38-39	ICT等の効果的な活用の仕方について理解し，指導に生かすことができる。
Q40-41	学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）について理解している。

## 資料2 ChatGPT 5.1 で使用したプロンプト例（質問項目 Q6-7 に対する分析）

あなたは教育学において質的研究をする人です。大学の英語教育担当の先生方にアンケートを実施しました。問いは「Q07 「小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動や外国語科、中・高等学校の外国語科の目標、内容について理解している。」の指導について工夫しておられること、苦勞しておられることを教えてください。」というものです。以下の規則に従ってアンケートの回答を分類、整理してください。

規則1：発話の中で共通するキーワードや概念を抽出しラベル名を付ける。これらは細分化されていても構わない。

規則2：これらのラベル名にコード番号を付与する。

規則3：抽出されたラベルに階層構造や上下関係があれば、コード番号の付け方にこの関係を反映する。

規則4：入力されたアンケート回答にこれらのコード番号を付けて出力する。1つの文に複数のコード番号がついても構わない。

規則5：上記規則1～4までの分析を行った後に、「全く難しくない」「あまり難しくない」「やや難しい」「とても難しい」の4レベル毎にコード番号の分布について分析の上、出力する。

## 資料3 上記コマンドに対するChatGPT 5.1 の提案例

次の手順で進めます：

1. Q07回答の内容をテキスト化（OCR）し、全回答を一覧化
2. 共通キーワード・概念を抽出してラベル化
3. 階層的コード体系（例：1. 教材活用 → 1.1 動画活用／1.2 教科書比較）を作成
4. 各回答に該当コード番号を付与
5. Q06の難易度（4段階）別にコード出現分布を集計・分析

処理を正確に行うために、まず画像からOCR抽出を行います。

そのあと分析を実行します。

## 資料4 ChatGPT 5.1によるキーワードの階層化例（質問項目Q6-7に対する分析）

コード	ラベル
1. 教材・資料活用	学習指導要領や文科省資料・動画・教科書などを教材として使用
1.1	文科省資料・一覧表・指導要領を活用
1.2	授業動画・MEXT チャンネル・YouTube 等の映像教材を使用
1.3	教科書・教材・年表・比較表・パワポ等を活用

2. 学習活動の工夫	クイズ・体験・模擬授業など，学び方の工夫
2.1	クイズ・アクティビティなど参加型学習
2.2	模擬授業・体験学習・実践的理解
2.3	LMS や小テストなど ICT 活用学習
3. 指導内容の工夫	小中高比較，理論と実践の往還，文言理解など
3.1	小中高比較による目標・内容の明確化
3.2	理論と実践の往還（橋渡し）
3.3	抽象的文言を具体化・可視化
4. 教育的課題・困難	教育上の制約・難しさ・理解の浅さなど
4.1	学生の理解が浅い・説明しきれない
4.2	時間的制約
4.3	外国語活動の扱い範囲・位置づけの難しさ
5. 教員の工夫姿勢	工夫・改善・省察の姿勢
5.1	学生が飽きないよう工夫・意識化
5.2	苦労や問題意識の表明（「余り苦労は無い」なども含む）

#### 資料5 Claude 4.5 による分析例

##### ○主な工夫

教員は教材・資料の積極的活用を最も重視しており，特に「あまり難しくない」と回答した層で顕著でした。具体的には，文部科学省の公式資料や学習指導要領の一覧表，授業動画（MEXT Channelなど）を用いて，抽象的な文言を具体的にイメージ化する工夫が見られます。また，小中高の目標・内容を比較することで，校種間の違いを明確化する手法も広く採用されていました。

学習活動面では，Kahootなどを活用した参加型学習や，模擬授業・体験学習を通じた理論と実践の往還が試みられています。LMSを用いた小テストと動画教材の組み合わせなど，ICT活用も進んでいることが分かりました。

##### ▽主な課題

一方，「やや難しい」以上の回答者からは，学生の理解が浅い・表面的であること，説明しきれないという困難が指摘されました。特に理論と実践の架橋には時間的制約もあり，模擬授業まで十分に行えないという声もあります。また，「外国語活動」（教科ではない）の扱い範囲について戸惑う教員もいるなど，制度的な位置づけの曖昧さが指導上の困難につながっていることが示されました。